

# 研究論文

に向けた難波からのコメント

## ■青砥弘幸「落語の国語科教材としての可能性—落語に内在する「ものの見方や考え方」に注目して—」

「落語」の国語科授業としての可能性を追及した先に見えたのは「人間の業」という、私たちが心底に持つ仏教的人間観であった。しかも落語は、そのことを「笑い」に包み、肯定的受容的に示してくれる。青砥氏のこの論考は、「落語」が国語科教材としての一時期の盛り上がり欠ける現状がいかにもったいないかを感じさせてくれた。「不意に」「覆される」力を持つ「落語」の実践を考えたい。仏教と国語科をつなぐ観点からも。

## ■青山之典「小・中・高等学校学習指導要領における古典観の検討」

論全体が渡辺春美氏の古典教育研究の意義づけになっている一方で、渡辺氏の志が道半ば以前であることを、高等学校の最も新しい科目「言語文化」教科書の内容から示すことにもなった。また、義務教育段階について「古典作品を易しくして触れ、親しむだけでは」「古典学習に積極的な意味」を学習者が見出すことは難しいとも指摘している。全てのジャンルの読みに「相対化」「対象化」が必要であることをあらためて示したといえよう。

## ■出雲俊江「小山内薫「正直もの」と鈴木三重吉「デイモンとピシラス」—『赤い鳥』の〈メロス話〉が照らし出すもの—」

太宰の「走れメロス」もその列に連なる「メロス話」が、様々に変容しつつも結局は「友情」話であったのに対し、『赤い鳥』の2篇の「メロス話」が（両方とも鈴木三重吉作の可能性が高い）「友情」ではなく、妹への思いや学問への信念を描いていることを指摘した論考である。『赤い鳥』が「なにか新しいこと」を目指そうとした一つの証左と言える。こういう細部からもこの雑誌の先取性を見つけ出す手腕は出雲氏ならではと言える。

## ■河上裕太「文学教育思想入門」

佐々原氏の先行研究を受け、河上氏は文学教育理論の根底にある思想マップを作成した。これは、再構築された国語科の一科目「思想科」につながるもので、私たちが囚われている「心の構え＝思想」を、文学教育理論の諸思想に見ようとした。自分が持つ「心の構え＝思想」を自覚化することが「思想科」の目標の柱であり、研究者もそのことが求められる。本論はその実践を研究の形で行っている。「実践＝研究」の姿勢がここに見える。

## ■木下恵介「ICTが文学の読みにもたらす可能性—国語科のICT活用実践調査を踏まえて—」

本論考は、ICTが国語科のどの領域で使われているか、特に文学教材でどう使われているかを、実践報告を分類することで明らかにした。本論考によれば、文学教材とICTとは親和性があり、意見の整理や話し合い、学習蓄積などに有用に今後も働くことが示唆されている。本論考を読んで痛感したのは、説明文教材の課題である。文学教材ほど多様で広がりのあるICT利用がされておらず、日本の説明文教材の閉鎖性を浮き彫りにした。

## ■金志唯（神谷志織）「移民の親子を重ねて『枕草子』を読む—定子と清少納言の關係に着目して—」

移民家族の親子関係と、清少納言と仕えた定子の関係とが、時空を超えてつながる。お互いに思い合いながらも、語り得ない、関係。そのままでも十分楽しめる枕草子だけれど、背景を知った時、そして、現在の「思い合いつつ語り得ぬまま苦悩する」現在の人々の関係をそこに重ね合わせた時、古典は全く別の「意味」

を持つ。金（神谷）氏は、古典作品（古典教材）がどうしても私たちに必要であることを、思いもかけない方向から示した。

#### ■黒川麻実「国語科教育における「戦争」と「平和」—戦争児童文学教材史を踏まえて—

戦争児童文学が戦前から現代に至るまでいかに「時代的气氛」に左右されてきたか。加えて「戦争児童文学教材」はますます「時代的气氛」の枷がはめられる。政治状況のみならず、人々の「気分」に左右され教材生命が揺れ動く。現在また「時代的气氛」によって「戦争児童文学教材」が盛り上がるとしたら、なんの学びもそこにはない。広島市出身の黒川氏の「在り方を議論し続けていく必要がすぐそこまで迫っている」と言う言葉は重い。

#### ■佐藤宗大「カント実践哲学の視点から『走れメロス』を読む—文学教育における（道徳的）価値に関する試論—

佐藤氏は、カントの実践哲学の観点（前半のカント哲学のまとめは簡潔明快である）から「走れメロス」が「自己愛」に貫かれたものと読み解いた。再び走り出すメロスは「道徳法則」を一瞬確立したが最後に戻ってしまう（赤面はその現れ）という。本論考は、文学教育が国語教育か道徳教育かという（無意味な）議論に裁断を下した。それはどちらでもあらなければならない、文学教育自体が「道徳教育」を問い直すことを示したのである。

#### ■澤口哲弥「批判的言語意識を育む国語科「読むこと」の指導—ことばからテクストのイデオロギーを読み解く—

クリティカル・リーディングについての、先行研究や思想、澤口氏の理論、実践と考察がコンパクトにまとめられた論考である。社会変革まで視野に入れた「強クリティカル」をも含みこんだ新しい読解プロセスと指導法を開拓しようとしている途中経過報告でもある。生徒たちの、「表現に立ち止まる」ことによる「読み方が変わった」というコメントは、国語教育の課題を浮き彫りにしており、澤口氏の更なる研究と実践の進展が望まれる。

#### ■杉岡佳奈「言語獲得の過程と心的理解の関連性—個人的事例からの考察—

本論考は、二人の子供の言語獲得、言葉の成長を丁寧に追跡した貴重な報告である。家庭と学校園の両方の様子を聞き取っている。家庭環境と特性と周囲の影響とが無限の多様性を生み出す。しかし、多様性があるからといって個人学習に追い込むのではなく、多様なままの集団がわいわいしながら授業を行う、現在の国語科授業が希望の光になるのだ。単純思考の大衆本が言語界限には出回るが、丁寧にみとっていくことこそ大切なのである。

#### ■中村暢「説明的文章指導における批判的読みの可能性—読者である学習者の側から捉えた場合—

本論考は「批判的読み」を追究してきた中村氏の集大成と言えるものである。先行研究を検討し、自身の「構成員的理解」論も援用し、日常読みと授業読み・科学理解の段階・感情によるバイアスなど、議論において必要な要点が全て検討されている。結論として、「批判的読み」授業のために「自己を知る」「知識を補う」「責任を持ちつつ情念が飛び交う」授業が必要だとしている。「批判的読み」実践・研究の新しい扉が開いたと言える。

#### ■中本菜穂子「自分の〈ことば〉をはぐくむ研究室」

退職するにあたり自分の実践を振り返りたかったときに現れたのが本論考であった。中本氏は素木しづという無名の作家を見つけ出し追究する感性と探究心があったから、このようにまとめることができた。「伴

走者としての指導者」「育て合う学習集団」「個別・集団・その他という、定期的な学びのカリキュラム」は、難波が意識して作ってきたシステムであった。このような実践の礎を作ってくださった浜本先生にあらためて感謝したい。

#### ■永井ほのり「加害／被害を語れない被抑圧者としての学習者—『プリズン・サークル』、「ばあさんとボク」を通して考えたこと—」

「エモーショナル・リテラシー（感情の識字）」の実践（映画と書籍）、そこから永井氏自身が想起した自身の個人誌、これらからは、何らかの事情で「情緒の不安定な学習者」の生きることの苦闘＝「ことばがみつからない」姿が見える。映画に出てきた「ペラペラと話すことで核心を」ずらす姿を、私もなんども「偏差値の高い学生や生徒や児童、そして大人」に見てきた。この人々の「感情の無識字」状況は、国語教育の重い課題である。

#### ■永田麻詠「性の多様性をめぐる中学校国語科の資質・能力に関する検討—人権教育の知見を手がかりに—」

「知識や技能という裏付けのない価値観や態度では、情緒的な内容にとどまりやすい」とあるように、価値・態度目標は技能目標と結びつかないと定着しない。それは「性の多様性」の学習についても同様である。また、教育方法も「参加型」でなければ目標にそぐわない。本論考は、価値目標が技能目標や教育方法と分かちがたく結びつくべきであることを改めて提示し「全ての多様な子どもたち」のための国語教育の方向性を示している。

#### ■浜本純逸「文学教育解体・新国語教育構築について」

私も改めて国語科の再構築について時間をかけ考えていこうと思った。その際基本となるのは、基盤となる科目となるはずの「思想科」である。ここに「宗教性」の問題も取り入れたい。浜本先生は、文学教材を甲型と乙型に分け前者を目的達成のツール、後者を人間理解を深めるものとした。このような柔軟な考えが、浜本国語教育だと改めて認識した。また、生成 AI にも着目しておられるところなど、先生の意欲は全く衰えていない。

#### ■原田大介「国語科における「クリップな読み」の導入—障害を描いた国語の教科書教材の考察を中心に—」

「障害当事者の多様で複雑な生を描いていない」国語教科書の課題を乗り越えるために、見えなくされた障害当事者や別の困難当事者を想像する「クリップ読み」を提唱した原田氏の論文は、教育が「代表化される悲劇と差別生成」とつながること、そこから国語教育としてどう抜け出すかその道筋を示した。提唱された単元は、複数教材を組み合わせた、浜本先生が提唱した「テーマ型総合単元」となっている。まさに温故知新である。

#### ■春木憂「国語科「読むこと」授業にみる「子どもの論理」—小学校第2学年『ふたりはともだち』実践を通して—」

成長するとは究極的には「自分の論理が成長する（客観を取り込んだ新たな主観の生成）」ことだ。教育は「子どもの（自分の）論理」をこのように成長させることである。春木氏はこの課題をずっと追究してきた。そのためにはまず子どもの論理をみつけなければならない。そこからの教師の仕事の流れを本論考は「みつける」「ひきだす」「はたらきかける」「つなげる」とした。この流れは、全教科領域の根本の流れとすることができる。

#### ■細恵子「保育者・小学校教員養成における読書の量的・質的評価—ダイナミックスキル理論に注目して—」

難波たちの調査では、デジタルよりも紙の読書への志向性が強いほど読解点数が高く、紙の読書の志向性

は読書習慣と関わっていた。本論考は、大学生でも読書習慣が身につく可能性を示唆している。ただそのためには、指導者が、確かな読書力概念を持ち、有効な手立てを複数立て、学生と伴走する姿勢を示すことが重要である。細氏が長年行ってきた読書日記の本領がここにある。質的分析のためのダイナミックスキル理論にも注目したい。

#### ■丸田健太郎「『自分のことば』を紡ぐために必要な他者の役割」

神戸大学大学院のとき、恩師浜本先生は「難波君は発達をやりなさい」と言われた。言語学を応用すればいいと安易に考えていた私にとっては青天の霹靂であった。しかし、それは私の未来の道を開けた。大学院ゼミも小中高国語科授業も保育の読み聞かせも、全て言葉を通して「他者と出会い新しい自分と出会う」場であるが、それを行う側は相手の「思考の先」「背景」を常に見通さなければならない。本論考でそのことを改めて痛感した。

#### ■森美智代・長澤貴「『主体』概念の議論にみる国語教育学の自明性—Subject と Agency を手掛かりとして—」

本論考は、国語教育学研究における「主体」等の概念の混乱を指摘した上で、その混乱に積極的な「国語教育学存立の意義」を見出し、「諸学問と教育実践との臍帯」として、「自らの自明性を揺るがす」ように「翻訳」という＜戦略＞を身にまとうことを、国語教育学に求めた。実践との出会いが国語教育学存立の免罪符にならないよう、「国語の理論と実践」の自明性を問い直す＜道具＞に諸学問を位置づける展望を見せたのである。

#### ■雷民激「＜機能としての語り手＞から『傷ついた語り手』へ—縁意識の世界観を通して—」

雷氏は大学院進学以来ずっと文学教育理論を追究している。その中で田中実の第三項理論に出会い、しだいにその課題に直面した。それについては本論考に詳述されている。私も同じように第三項理論の課題に直面していたが、雷氏はその課題から発展して、オリジナルである「縁意識」理論を構築していった。また、あまり注目されなかった「語り手の内実」について考察を進めた。雷氏の研究は今後の文学教育理論に大きく貢献するだろう。

#### ■李勇華「『第三項』論に再定義された〈近代小説〉—川端康成『片腕』と村上春樹『UF0 が釧路に降りる』との比較を通して—」

本論考は、第三項理論のわかりやすい事例研究である。川端康成と村上春樹の両作品が、「リアリズムの外」（「リアリズム」の外ではなく）にあること、【「私」と「私が作り出した対象」との二項を「私」と「私の外」ととらえ（世界観）処理する（世界観認識）という】「常識」を破り、「外」を含めた三項でできていること、その「外」によって「再構築」が起きることを示した。それが研究者に理解されえないことも合わせて見せた。